南足柄市立南足柄小学校

研究テーマ：Ｓｔａｙ　Ｌｅａｒｎｉｎｇ

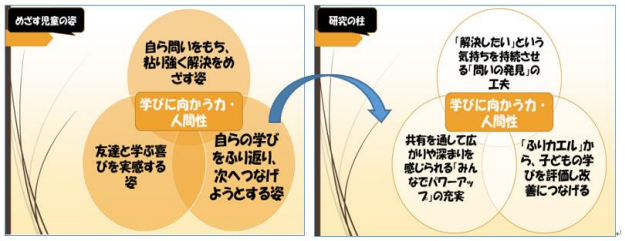
～他者と豊かに関わり　自ら学び続ける人を育てる～

１、実践の目的

コロナ禍において、児童の家庭での学習を支援する中で、児童に学習意欲をもたせて取り組ませることの難しさを痛感している。これまでは、「学びに向かう力」を教師がコーディネートできる授業を通して育むという研究を進めてきたが、このような状況下で、児童の学びに向かう力をいかに持続させるか、いかに本物にするかが大切であると改めて感じることとなった。

本校では、「学びに向かう力」を育むために、児童に「問い」をもたせることが大切であると考えて研究を進めてきた。今年度より算数科に加えて国語科も研究教科とする。国語科の特性として単元を通して学習問題を設定するため、「問い」について捉え直すことができ、研究をさらに深化させることができるのではないかという仮説である。

本校では、本市の学びづくり研究で作成した「探究型授業」の視点を授業改善に生かし、市全体でめざす「確かな学力」の向上に向けて取り組んでいる。他者と豊かに関わり自ら学び続ける姿をめざすことで、本市のめざす「夢と希望を持って、粘り強く自分の道を切り開く子ども」像に迫っていきたい。



２、実践の内容

（１）「解決したい」という気持ちを持続させる「問いの発見」の工夫

本校では、これまでの取組により、本時の問いを焦点化するための話し合いが習慣化してきた。一方で、問いの発見の時間には意欲的に取り組もうとする児童の姿が見られるが、授業が進むにつれて話し合いが停滞したり、児童自身がねらいを意識していない単なる活動となってしまったりする様子が見られた。「学びに向かう力」を育むためには、「本時の学習課題を焦点化するための“問い”」ではなく、「本時の学習課題をきっかけに追究したいと感じる“問い”」をめざす必要がある。驚きや矛盾、対立などが起こる場面を設定し、児童の自然な思考の流れの中で“問い”を生み出すことによって、児童が発見した問いの解決に向けて、一人でじっくり考え、友だちと共有し、「できた」「わかった」と実感しながら学習を振り返り、さらなる探究につながるようにしたい。

（２）共有をとおして広がりや深まりを感じられる「みんなでパワーアップ」の充実

これまでの校内研究における協議では、共有の時間のもち方について話題となることが多く、課題も多く見えてきた。児童の思考や話し合いを深める教師の発問、板書の工夫や、単なる発表会に陥らないようにするための比較・検討の習慣、説明する必然性

のもたせ方などである。今年度は、改めて見えてきた授業の本質、「学校で学ぶ喜び」を実感させるために、共有の質を高めて「友達と学ぶ喜び」を味わわせたいと考えた。そこで、二つ目の柱を「共有をとおして広がりや深まりを感じられる『みんなでパワーアップ』の充実」と設定することで、「友達と学ぶ喜びを実感する姿」の実現をめざしていく。

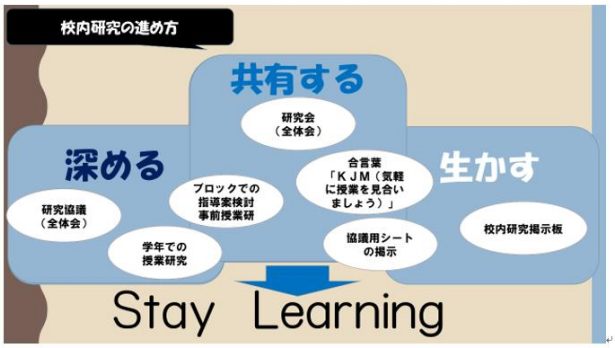
（３）「ふりカエル」から、子どもの学びを評価し改善につなげる

教師が授業を振り返る際に、児童の姿を捉えることが大切である。その際、感覚的に捉えるのではなく、児童が振り返りで書いた文章等を根拠に、児童の学びを評価し改善につなげていく。参観者の個々の尺度によって児童の姿の捉え方に違いが出ることにより、研究の柱の捉え方が変わってしまうことがないように、児童の振り返りという事実を根拠とした協議となるようにしていきたい。

さらに、効果的に振り返りの時間を活用していくことで、児童自身が自ら学習を調整しようとする力を高めることにもつながる。振り返りの視点を示したり、互いに共有し合ったりするなどの工夫をすることで、柱にある３つの児童の姿があらわれ、相互に影響し合い「学びに向かう力」が伸びていくことを期待する。

（４）校内研究の進め方

校内研究は、職員にとって楽しさを感じられる場であるべきだと考える。共に授業研究を行う楽しさを感じられるような、より質の高い校内研究を実現するために、“共有する”“深める”“生かす”ことが大切なのではないかと考える。そこで、この３点をふまえた校内研究を進めることを、年度始めに職員全体で確認し、取り組むこととした。



３、実践の成果

今年度の実践では、国語科・算数科ともに、教師が事前に児童の反応を予想し、単元計画を工夫することにより、本時や単元の目標達成につながる「問い」を、児童の自然な思考の流れに沿って設定することができた。また、児童は「解決したい」という気持ちを持続させ、単元の学習問題を常に意識して学習を進めたり、自分の到達度をはかったりすることができた。

さらに、前時までの学習の中で出された友だちの発言をもとに、自分の考えを持ったり、「分からない」という素朴な疑問を全体で共有することで問題を解決したりする児童の姿が見られた。

４、今後の展開

今年度、育てたい児童の姿に直結した研究の柱を設定することで、授業を共有する視点が具体的になるという点で深まりのある研究協議につながり、テーマに迫る手立てとなった。今後も、児童の「わかった」「できた」「おもしろい」「楽しい」を引き出す授業をめざすこと、そして、どのような状況下でも、生涯に渡って他者と豊かに関わり、自ら学び続けるような人を育てるというテーマの実現に向けて、チームでの授業づくりに努めていきたい。